

彼が狼だった日

北方謙三

集英社

彼が狼だった日

北方謙三

集英社

かれ
彼が狼^{おおかみ}だ^ひった日

一九九五年六月三〇日 第一刷発行

著者 北方謙三^{きたかたけんぞう}

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一五

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

編集部

(〇三) 三二二〇一六一〇〇

電話

販売部 (〇三) 三二二〇一六三九三

制作部

(〇三) 三二二〇一六〇八〇

印刷所 廣済堂印刷株式会社

製本所 ナショナル製本協同組合

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。
本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

目次

第一章 波濤はるかなり

5

第二章 再会の海

105

第三章 獣たちの駆ける夜

205

装丁 スタジオ・ギブ
装画 不二本蒼生

彼
が
狼
だ
っ
た
日

第一章

波濤はるかなり

気に食わないやつらばかりだった。

そういうやつらの言いなりになって飛び回っている俺は、自分をもっと気に食わないと思っていた。

夜中の二時間ほどの間、俺は死んでいた。死んでいると思えば、大抵のことはできてしまうのだ。貰えるチップがもうちょっと多ければ、俺は四時間は死んでいられる。

電話が鳴った。俺は少しだけスピードを落とし、アームレストの上の受話器を取った。

「アンジェラから拾ってこい。客は店で待っているから、一緒にドリームに運べ」
長沢の声は、それだけだった。

俺はアンジェラへ車を返し、ひとり出てきた女の子を拾いあげると、店へ行った。客は女の子の馴染みで、車に乗りこむなりキスを交わしたりしている。俺のことなどお構いなしなのは、当然と言えば当然だった。車を汚すようなことをやらないかぎり、俺はなにも言わない。

ドリームが、一番遠いモーターだった。自分の車を使う客が少ないのは、このところ取締が厳しいからだ。警察は、飲酒運転で点数を稼ごうとしている。

ドリームで二人を降ろした。貰ったチップは千円だった。舐めるなよ。言いそうになったが、黙

っていた。チップなしの時もあるのだ。

店へ戻った。まだ、客がひとり飲んでいて。

「一杯やるか、シゲ？」

「帰ります」

俺は、クラウンのキーをカウンターに置いた。今夜も、あぶれた女の子はいない。客がひとり、あぶれているだけだ。

「おい、坊主」

出て行こうとした俺に、その客が声をかけてきた。

「商売繁盛はんじようじゃねえか」

あぶれた客の絡みになど、付き合っていたくなかった。長沢を見たが、無表情にグラスを磨いているだけだ。

「ここへ座んな。一杯奢ってやる」

「俺、運転しますから」

「マスターが、一杯やるかって訊いてたじゃねえか」

「ソフトドリンクですよ」

「じゃ、ソフトドリンクを奢ってやるから、ここへ座んな」

「のどは渴かわいてません」

男の左手の小指の先が、欠けていた。俺はちょっと肩を竦めた。ここところは、逆わない方が

よきそうだ。

長沢が、俺の前にコーラの瓶を置いた。瓶だけだ。せっかく磨いたグラスを出すことはない、とでも考えたのだろうか。

「名前は？」

「シゲって呼ばれてます」

「名前を訊いてんだ、どう呼ばれてるか、訊いてるわけじゃねえ」

「野田繁樹」

「そうか、野田ってんだな。この爺さんの、孫みてえな歳だな」

なにか質問されたわけではないので、俺はコーラの瓶に口をつけた。その気になれば、やくざのひとりぐらゐに負けるとは思わない。ただ、長沢の立場もあるだろう。

「この爺さんがよ、フィリピンやタイの女の子を使つてよ、荒稼ぎしてんだよ」

男の喋り方はゆったりとしていたが、酔っているわけではなさそうだった。俺は半分飲んだコーラを、カウンターに置いた。

「世の中じゃよ、ひとり占めしたがるやつが時々いるが、どうなるか知ってるか？」

「さあ」

「この爺さんのことだよ、坊主。なんでもひとり占めにすりゃいいってもんじゃねえ。そこをどこを、教えてやりてえんだがな」

俺は黙っていた。男の目当てがなにかは、ほぼ見当がついたが、俺がどうこうすることはなか

った。

「教え方ってのも、いろいろある。言って聞かせることもありや、牀に教えてやるってこともできる。いまのところ、この爺さんは言って聞かせても駄目なんだな。牀に教えるったって、そのとたん死なれちゃ、こつちも困る。それでな、おまえの牀に教えてみようかと思ってよ」

「いいですよ、俺は」

「なにがいいんだよ。教えてもいいって言ってるのか？」

「教えられたくないです」

俺は、ちょっと長沢に眼をくれた。長沢が、小さく頷いた。

俺はコーラの瓶を掴み、親指で押さえて栓せんをすると、五、六度振った。男が覗きこむ。コーラが、男の顔に噴き出した。

叫び声をあげ、男が眼を掌で押さえた。瓶を、男のこめかみに叩きこむ。男はカウンターに伏せた恰好になり、それからスツールを落ちて、滑るように床に倒れた。四十をいくつか超えたというところだろう。底が磨り減って、くたびれた靴を履はいていた。

俺は、倒れた男の股間を、四度続けて蹴けりつけた。飛び出しそうなほど眼を見開いた男は、すぐにぐったりと動かなくなった。

「どこかに捨ててこい、シゲ」

俺は頷き、男の牀を引き摺って外へ出た。

臨時収入だ。こういうやつをひとり片付ければ、一万円の手当てが貰える。

男を後部座席に押しこみ、十分ほど突っ走ったところで松林に車を突っこんだ。男を引き摺り出した。砂浜に転がした時、男は低い呻きうめをあげた。俺はもう一度男の股間を蹴りあげた。月の光があるが、表情はよくわからなかった。

五万円で買ったサニーは、ブラグを交換しただけで、実によく走るようになった。七万キロ走っていて、リアのサスペンションがちょっと頼りないが、エンジンは元気だ。

俺が長沢の仕事をするのは、金のためもあるが、長沢が好きだったからだ。勤めていた工場が潰れて困っていた時、なにも言わずバーテンに雇ってくれたのが長沢だった。十一時までで、それから俺は女の子と客をモーテルに送り始める。それで二時間。一時には仕事を終るのだ。

長沢は、要するに売春婦の元締だった。働きはじめて二日目には、そのことがわかった。別に、なんとも思わなかった。そういう店が、この街にいくつもあることは知っていた。外国人の女が稼ごうと思うと、そういう仕事しかないのだ。女たちも、それが目的でこの国へやってくる。

長沢は、女の子たちに無理強じいをしているわけでもなく、搾り取っているわけでもなかった。よそでひどい目に遭あうなら、自分が引き受けてやった方がいい、と考えただけだった。なぜそうするかということ、ある夜、長沢は俺に喋しゃべってくれた。かなり酔った時だ。

長沢が俺ぐらいの歳のころというから、もう五十年前も前の話だが、戦争でマレーシアやフィリピンに行ったという。そこで日本軍がどれほどひどいことをしたかという話を、泣きながらしたのだ。五十年前のことだとは思わない、と長沢は言った。たとえ五十年経とうと、ひどいことをしたという事実は消えたりはしない。兵隊たちはみんなやったことだと、言い逃れをする気もない。いま、

その国の女の子たちが、日本に働きに来ている。それなら、助けてやるのが当然ではないか。

長沢が泣くのを見たのは、あれ一度きりだった。死んだ祖父^{じい}さんの友だちで、俺は中学生のころから長沢を知っているが、戦争に行った話を聞くのも、はじめてだった。

戦争でどういうひどいことをしたのかは、およそ見当がついた。村に入って若い娘を強姦したり、食料を奪ったりということだろう、と俺は思った。娘の眼の前で、その父親の首を斬った、と長沢が言いはじめた時は、さすがにびっくりした。長沢は、まるで転がっている首を拾いあげるように動かし手を、はげしくふるわせていた。

アパートへ着いた。

俺の部屋は六畳で、台所もその中にあり、ユニットバスがついていた。俺には、お似合いだろう。少なくとも、高校を卒業して入った工場の寮よりは自由だった。

シャワーを使い、ウイスキーを一杯ひっかけると、すぐに蒲団^{ふとん}に潜りこんだ。眠れる時に眠る。それが、いまの俺の習慣のようなものだ。

酒が回ってきた。大して酒に強くないことを、酒を飲みはじめてから知った。酔っ払ってわけがわからなくなる前に、気持が悪くなってくるのだ。ストレートで四、五杯が適量だと、いまはわかる。

眠った。電話ですぐに起こされた。

「一時半ごろ電話したんだけど、いなかったみたい」
「悪かった。遅くなった」

あのやくぎの男の相手をしていただけ、いつもより遅くなった。里美は、いつものように電話をしたのだろう。里美とは、もう四ヵ月になる。一時半前後におやすみの電話をする習慣ができたのは、二ヵ月ほど前からだ。ふだんは里美が電話をし、遅くなる時は俺が外から電話をする。

やくぎなどを相手にしていて、自分で思っている以上に興奮していたのかもしれない。

「悪かったな。バタバタしていて、電話をする暇もなかった。もう眠っちまったんじゃないかと思って、かけられずにいたんだ」

こんな嘘は、四ヵ月の間に結構積み重なった。

「いいの。なにかあったんじゃないかと思って、ドキドキしちゃったわ。車の事故とかね。ちゃんと帰ってくれたらいいわ」

それから俺と里美は、しばらく今日あったことを話し、おやすみと言い合って電話を切った。

2

入ってきた客を見て、長沢の表情がちょっと動いた。この間やくぎをぶちのめしたが、それは大丈夫だと長沢が判断したからやったことだった。長沢は街にある組の本部にいくらか出していて、やくぎとのトラブルは起きないはずなのだ。この間のやくぎは、ただ遊びに来て、あぶれただけだろう。小指の先が欠けた男に、長沢も女の子を付けるのをためらったに違いなかった。

「どうかね。景気はよさそうじゃないか」

客は二人で、歳上の方がカウンターに腰を降ろして言った。もうひとり、俺と同じくらいの歳だ。

「通りかかったもんでね、寄らせて貰った」

長沢は、時々頭を下げながら応対している。

「なんにしましょうか？」

カウンターの中から、俺は訊いた。二人の眼が、同時に俺にむいた。たじろぐような視線だった。やはり、やくざかもしれない。

二人とも、注文はコーラだった。一杯五百円で、二人合わせても千円の勘定だ。

「空手、やってんのかい？」

俺の拳こぶしのタコを見て、若い方が言った。

「高校時代にね。初段ですけど」

それきり、二人の視線は俺からそれた。長沢は、相変らず頭を下げながら、丁寧に應對している。刑事らしいということに、俺はようやく気づいた。長沢との会話の中には、俺の知らない名前がいくつも出ている。

三十分ほどで、二人は帰った。

「今夜は、看板で女の子たちをあがらせるぞ。おまえもだ、シゲ」

「いやな野郎ですね。刑事なら、もっと悪いやつらをパクリやいいのに、楽して点数だけ稼ごう

としてやがる」

「でもないさ。取締に注意しろと、言外に教えてくれた。それを教えに来たようなもんだらう」

「そうなんですか」

それでも、気に食わなかった。刑事だからだ。刑事とか教師とかは、信用しない方がいい。俺は高校を卒業して就職する時、教師の強引な勧めで、この街の電器部品工場に入った。求人難の時で、俺はその気になれば東京の工場にも就職できたのだ。

その教師は、俺が二度停学処分を受けていることを問題にした。まるで、前科者の扱いだった。世間とはそんなものだろう、と俺はなんとなく考えた。四度停学処分を受けたやつが、東京の大会社の工場に入ったのを知ったのは、俺が就職を決めたあとだ。

相部屋の、暗い独身寮はなく、おまけに俺が入って八ヶ月後に、工場は潰れた。その工場にひとり送りこむことにいくらと、教師が礼金を受け取っていたことを知ったのは、潰れたあとだ。

世間とは、そんなものだった。

取締があるという噂でも流れたのか、客は少なく、十一時半に女の子たちは四人とも帰り、十二時には俺は掃除も終えていた。

「久しぶりに、どこかで飲むか、シゲ？」

長沢が言った。いつも派手なブレザーにアスコットという恰好で、キザな爺さんだと客たちにはからかわれている。白髪で、顔の皺は深いが、後姿だけを見るとずっと若い感じがした。身ぎれいな方だろう。死んだ俺の祖父さんは、俺が憶えているかぎり、ずっと汚ない老人だった。